IV－3　北海道開発における宗教施設の役割

北海道大学大学院環境科学研究科　杉本　好宏
同上　正員　山村　悦夫
同上　太田　充

1．はじめに

北海道開発の歴史は、寒冷という自然的条件を伴うことから、その生活は想像を絶するものであったことは諸般の記録をみても明かである。その開発に携わる人々の生活を精神面で支えてきたものの一つとして宗教をあげることができる。北海道という開拓地における宗教は、祖先代々の地を捨て、新天地に居を定めた移住者の心に平安と定住化の気持ちを起こさせるものとして期待されていた。また、宗教施設の社会的活動として寺小屋や簡易診療所などに見られるように、教育や医療の機能を備えていたものもある。この例として、教育の分野では、本誓寺（浄土宗）寺小屋式教育が芦別小学校の母体になったり（明治31年）、医療の分野では、フランシスコ修道会のグアタループ修道院長が中心となって現在の天使病院（札幌市）の母体である医療施設「天使の園」を開設（明治44年）したことなどがあげられる。このような宗教団体・施設の有する機能は住民の心の拠り所となったばかりでなく、東本願寺（真宗）が現在の国道230号線である「東本願寺道路」を完成させた（明治10年）例などにもみられるように開発の大きな原動力となったはずである。

北海道開発の研究は様々な角度からなされているが、宗教との関係はあまり研究されていない。また、北海道における宗教の開教史の研究は仏教、キリスト教においては本山を中心とする視点からの布教史として把握されがちであり、神道は国教一致による政策面からとらえられがちである。つまり、社会的な機能を有する宗教施設として住民の精神を通して地域開発に及ぼした影響というものは見失われがちであった。北海道だけにとどまらず、他の地域においても歴史的にみて、宗教機能が地域開発に及ぼしてきた影響は広範囲にわたるものと推察される。しかし、その一方で宗教活動を客観的に分析した研究はほとんどなく、未だその影響がどのようなものであるかは、主観的な判断の域を出ていない。

本研究の目的は２つある。北海道開発における宗教の地域社会に与える影響を構造的にとらえ、大正・昭和初期を中心に、まず、北海道の１４支庁における宗教施設の発展状況の特徴をみてみることである。そして、数量的手法によって開発等に対する影響を分析しその有効性の検証を試みるこである。

2．地域社会における宗教施設の位置づけ

北海道の開発にあたって、地域社会の未発達の状態を経験してきたことは言うまでもない。まず、その状態を克服してきた地域社会を精神面で支えてきた社会的施設の地域社会における構造を考えてみたい。様々な社会施設は、住民生活の安定と充実を目的として地域社会に貢献している。その社会施設の人々の精神に与える影響は大きい。何故なら、特に未開発地域において社会施設の有無あるいは、充実の状態は移住民の開発や定住に対する意欲を左右すると考えられるからである。

北海道において、宗教団体や宗教活動にたずさわる人々が開拓・地域開発に貢献してきた歴史的事実は、数多くある。次に、これらの歴史的事実を基に、地域社会における宗教の位置づけを行なってみたい。宗教というものを地域の社会生活において理解するためには、住民の心や精神面に与える影響をとらえなければならない。すなわち、宗教活動そのものは住民の日々の生活の個人的な悩みや苦しみを宗教的知識によって癒す事を目的としているからである。このように、地域社会における宗教の位置は、住民が安心して定住することができる社会を支える複合的な社会的施設の一つとして考えることができる。そして、その同じ目的

The Functions of Religious Facilities in The Development of Hokkaido
by Yoshihiro SUGIMOTO, Etsuo YAMAMURA and Mitsuru OTA

を有する社会施設として病院（医療）や学校（教育）なども人々を精神面で支えてきた。病院は医療機能として開拓・開発を志す人々の生活上の病気やけがなどの不安を和らげた。また、学校は教育機能として生徒を通じて、人々に正しい生活上の知識を提供した。その施設の有無は、特に子供を持つ移住民の場合、将来における第二世の教育を受ける可能性を問うもので、地域への定住化に少なからぬ影響を及ぼした。

ここで、住民の生活に安心感をもたらすことを目的とする様々な種類の社会的施設が住民を通して地域の発展や開発に寄与することを「精神的安定機能」と呼んでみたい。

本研究では、「精神的安定機能」は基本的に宗教施設、学校、病院という３つの社会的施設の複合によってもたらされると考えてみた。何故なら、これらの社会的施設は未発達な地域状態であっても比較的どの様な市町村にも、人口増加に順じて存在したからである。この３つの社会的施設の複合は、住民の精神的基盤の安定化をはかることができる。そして、この精神的安定化が地域構造を支える人口動態、産業動態に影響を与えることにより地域発展につながる。最終的に、この影響は住民の定住化に寄与することになる。また、この定住化は人口・産業動態への影響を通じて様々な社会的施設を発展させる。以上の概念を図 １に表わしてみた。

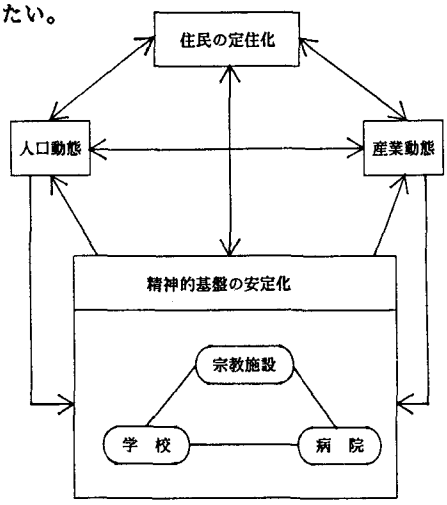

図 １　精神的安定機能の概念図

３．各社格・宗派の地域別特徴

（１）分　析

各社格・宗派がどのような動態的特徴を持って「精神的安定機能」として地域開発に寄与したか分析してみる。対象地域は、支庁別による１４地域とする。それぞれの地域の神社は官県社、村社、無格社、寺院は天台宗、真言宗、浄土宗、臨済宗、曹洞宗、真宗、日蓮宗、法相宗、教会は天主公教会、ハリスト正教会、日本キリスト教会、組合キリスト教会、日本聖公会、浸礼教会、日本メソジスト教会、その他の教会の合計１９社格、宗・教派に分類する。動態的特徴をみるために、地域の基盤を支えている総人口数との相関と、社格、宗・教派の宗教施設の年平均伸び率をそれぞれグラフの横軸、縦軸に表わした。それぞれの指標は研究対象時代（明治４４～昭和１２年）の２７ｶ年をもとにした。

図 ２から図 １５に各地域の分析結果を示す。

凡　例

Ｓ１	官県郷社	Ｔ１	天台宗	Ｔ５	曹洞宗	Ｃ１	天主教会	Ｃ５	日本聖公会
Ｓ２	村　　社	Ｔ２	真言宗	Ｔ６	真宗	Ｃ２	ハリストス教会	Ｃ６	浸礼教会
Ｓ３	無 格 社	Ｔ３	浄土宗	Ｔ７	日蓮宗	Ｃ３	日本キリスト教会	Ｃ７	日本メソジスト教会
		Ｔ４	臨済宗	Ｔ８	法相宗	Ｃ４	組合キリスト教会	Ｃ８	その他

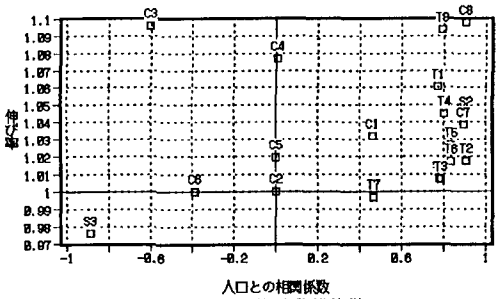

図 ２　石狩地域の宗教施設動態特徴

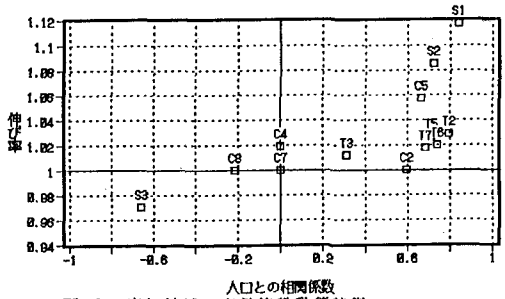

図 ３　空知地域の宗教施設動態特徴

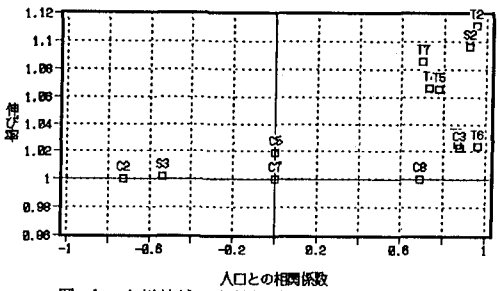

図 4　上川地域の宗教施設動態特徴

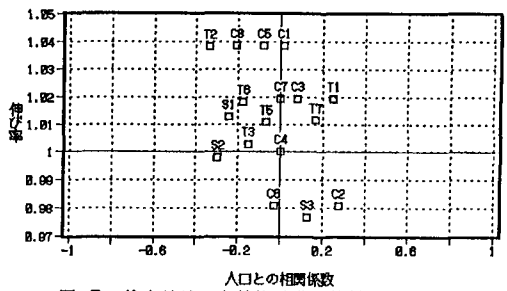

図 5　後志地域の宗教施設動態特徴

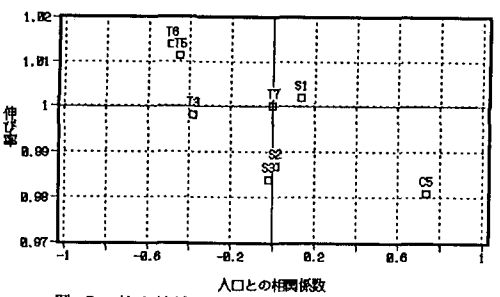

図 6　桧山地域の宗教施設動態特徴

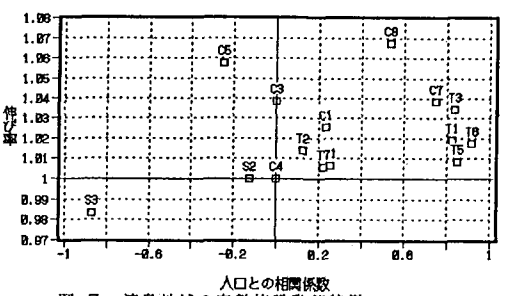

図 7　渡島地域の宗教施設動態特徴

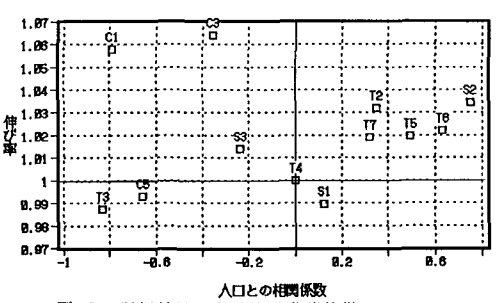

図 8　胆振地域の宗教施設動態特徴

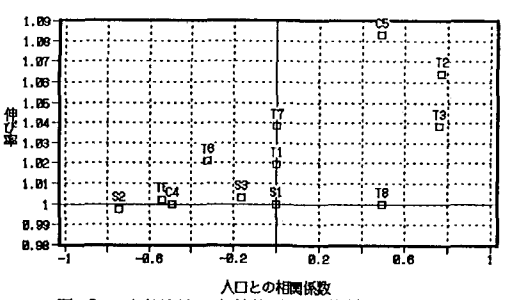

図 9　日高地域の宗教施設動態特徴

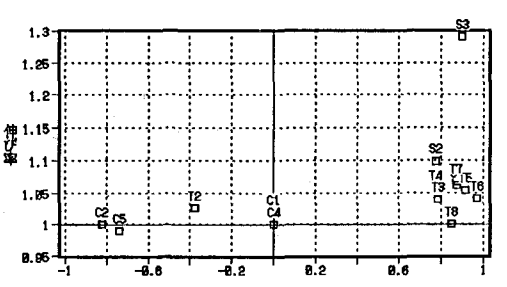

図 10　十勝地域の宗教施設動態特徴

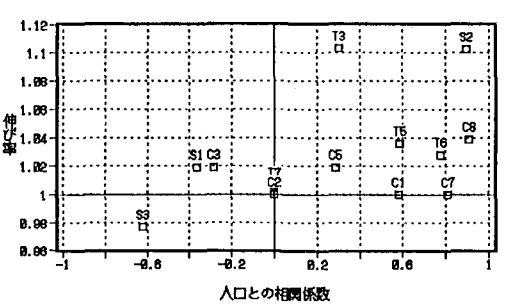

図 11　釧路地域の宗教施設動態特徴

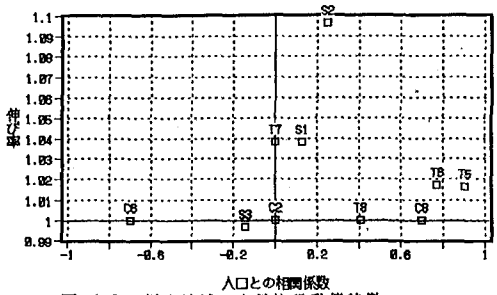

図 １２　根室地域の宗教施設動態特徴

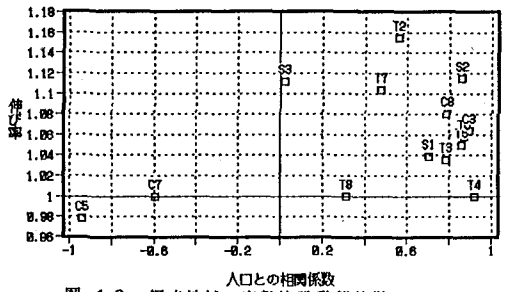

図 １３　網走地域の宗教施設動態特徴

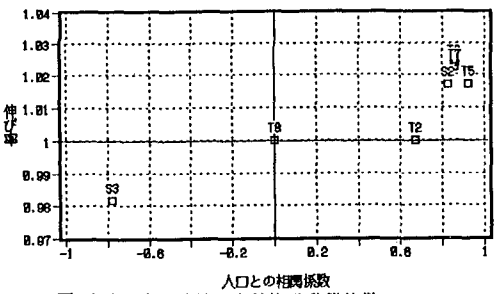

図 １４　宗谷地域の宗教施設動態特徴

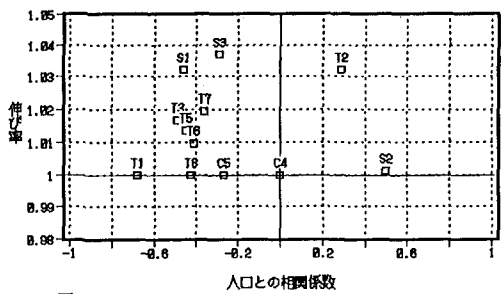

図 １５　留萌地域の宗教施設動態特徴

（２）考　察

宗教施設の発展状態を示すグラフ上の点の位置によって、宗教施設の分類をし、その特徴づけを行なう。図 １６に示されるように、特異点を除いた全地域のグラフ上の点の分布をみてみると７つのカテゴリーに分類できるようである。それぞれのカテゴリーの範囲の具体的な数値と特徴を以下に述べる。

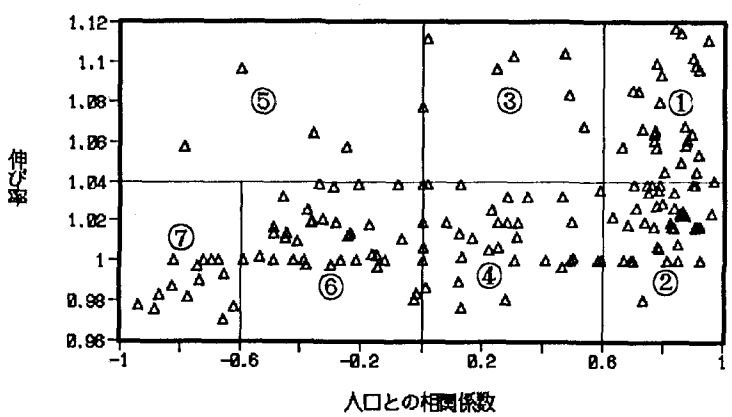

図 １６　特徴分類のカテゴリー範囲

①（相関係数0.6以上～1.0；伸び率1.04以上）人口との相関係数が高く、伸び率も高いので、人口動態に自然にのっとった施設の増加と、自ら努力を行なって発展したという優秀な特徴を持っている。②（相関係数0.6以上～1.0；伸び率1.04未満）人口との相関係数が高く、伸び率もほとんどの点が1.0以上なので普通の発展状態であったといえる。③（相関係数0.0以上0.6未満；伸び率1.04以上）人口との相関は高くないが伸び率が高いことから、宗教を伴った集団移住などが地域社会にうまく根付いた例にみられるように、特定の住民達に支えられて自己努力によって発展してきた特徴をもっている。④（相関係数0.0以上0.6未満；伸び率1.04未満）地域社会に新しい宗教施設が受け入れられつつある状況を示しているようであり、順調な発展途上にある特徴をもっている。⑤（相関係数-1.0～0.0未満；伸び率1.04以上）人口との相関係数が逆相関であることから、人口の影響に関係なく自らの多大な努力によって発展するという起業家精神あふれる特徴をもっている。⑥（相関係数-0.6以上0.0未満；伸び率1.04未満）うまく地域社会になじまず、衰退途上あるいは、なんとかして施設を維持しょうとしている特徴をもっている。⑦（相関係数-0.6未満～-1.0；伸び率1.04未満）伸び率も人口との相関係数も低いことから、地域発展における必要性や貢献度が低く、人々の人気も引きつけることができず衰退していった特徴を備えている。以上の分類結果を表 １にまとめた。

表 1　各地域における各社格・宗派の宗教施設の動態的特徴分類表

カテゴリ	具体的数値	石狩	空知	上川	後志	檜山	渡島	胆振	日高	十勝	釧路	根室	網走	宗谷	留萌
①	相関係数 0.6以上 平均伸び率 1.04以上	村社 天台宗 臨済宗 法相宗 その他	官県社 村社 日本聖	官県社 村社 真言宗 臨済宗 曹洞宗 日蓮宗					真言宗	官県社 村社 無格社 臨済宗 曹洞宗 真宗 日蓮宗	村社		村社 曹洞宗 真宗 日本キ その他		
②	相関係数 0.6以上 平均伸び率 1.04未満	官県社 真言宗 浄土宗 曹洞宗 真宗 日本メ	真言宗 曹洞宗 真宗 日蓮宗	浄土宗 真宗 日本キ その他		日本聖	天台宗 浄土宗 曹洞宗 真宗 日本メ	村社 真宗	浄土宗	浄土宗 法相宗	真宗	曹洞宗 真宗 その他	官県社 天台宗 浄土宗 臨済宗	村社 真言宗 浄土宗 曹洞宗 真宗 日蓮宗	
③	相関係数 0.0以上 0.6未満 平均伸び率 1.04以上	組合キ				組合キ	その他		日本聖		浄土宗	村社	無格社 真言宗 日蓮宗		
④	相関係数 0.0以上 0.6未満 平均伸び率 1.04未満	日蓮宗 天主教 ハリス 日本聖	天台宗 浄土宗 臨済宗 法相宗 天主教 ハリス 日本キ 組合キ 浸じ教 日本メ	天台宗 法相宗 天主教 組合キ 日本聖 浸じ教 日本メ	無格社 天台宗 臨済宗 日蓮宗 法相宗 天主教 ハリス 日本キ 組合キ 日本メ	官県社 村社 天台宗 真言宗 臨済宗 日蓮宗 法相宗 天主教 ハリス 日本キ 浸じ教 日本メ その他	官県社 真言宗 臨済宗 日蓮宗 法相宗 天主教 ハリス 日本キ 組合キ 浸じ教	官県社 天台宗 真言宗 臨済宗 曹洞宗 法相宗 ハリス 組合キ 浸じ教 日本メ その他	官県社 天台宗 臨済宗 日蓮宗 法相宗 天主教 ハリス 日本キ 浸じ教 日本メ その他	天台宗 天主教 日本キ 組合キ 浸じ教 日本メ その他	天台宗 真言宗 臨済宗 曹洞宗 日蓮宗 法相宗 天主教 ハリス 組合キ 日本聖 浸じ教	官県社 天台宗 真言宗 浄土宗 臨済宗 日蓮宗 法相宗 天主教 ハリス 日本キ 組合キ 日本聖 日本メ	法相宗 天主教 ハリス 組合キ 浸じ教	官県社 天台宗 臨済宗 法相宗 天主教 ハリス 日本キ 組合キ 日本聖 浸じ教 日本メ その他	村社 真言宗 臨済宗 天主教 ハリス 日本キ 組合キ 浸じ教 日本メ その他
⑤	相関係数 -1.0以上 0.0未満 平均伸び率 1.04以上	日本キ					日本聖	天主教 日本キ							
⑥	相関係数 -0.6以上 0.0未満 平均伸び率 1.04未満	浸じ教	その他	無格社	官県社 村社 真言宗 浄土宗 曹洞宗 真宗 日本聖 浸じ教 その他	無格社 浄土宗 曹洞宗 真宗	村社	無格社	無格社 曹洞宗 真宗 組合キ	真言宗	官県社 ハリス	無格社	日本メ		官県社 無格社 浄土宗 曹洞宗 真宗 日蓮宗 法相宗 日本聖
⑦	相関係数 -0.6未満 平均伸び率 1.04未満	無格社	無格社	ハリス			無格社	浄土宗 日本聖	村社	ハリス 日本聖	無格社	浸じ教	日本聖	無格社	天台宗

凡例　官県社：官県郷社　天主教：天主公教会　ハリス：ハリストス正教会　日本キ：日本キリスト教会　組合キ：組合キリスト教会
日本聖：日本聖公会　浸じ教：浸じ教会　日本メ；日本メソジスト教会

ここで、カテゴリー⑥は大変特徴的な宗派と思われるので、具体例をみてみたい。表 2より、日本キリスト教会が石狩、胆振両地域において活躍した様であるが日本キリスト教会の特徴としては日本人による真実のキリスト教会を形成することを純粋に念願し、思想・経済的に「自主」「独立」の教会で改革派精神に立ち長老主義教会政治を行なったことがあげられる。これは、⑤のカテゴリーで考察された特徴と合致していると思われる。具体的に、石狩地域においては日本基督教会、円山教会、札幌北一条教会などがあり、胆振地域においては室蘭教会、伊達教会、苫小牧教会などがあげられる。

4．地域開発における精神的安定機能の影響力

（1）　分　析

精神安定機能を構成する施設が、どの程度定住化に寄与しているかをみることによって地域開発への影響力としてみたい。定住化の進み具合いの指標として、人口、世帯数、市町村数を用い、目的変数とした。また、精神的安定機能の構成施設として宗教施設総数、小学校数、公・私立病院収容人員数を用い、説明変数

として重回帰分析を行なう。サンプルは研究対象時代とした明治４４年から昭和１２年の２７年間のデータを用いる。このときの各種統計量を表 ２に示す。重回帰式は、

$$Y=0.28867X_1+1.40204X_2+0.24624X_3-0.94732$$

Y ：北海道全域の人口、世帯数、市町村数の年平均伸び率の平均の３項移動平均

X_1：北海道全域の宗教施設数の年平均伸び率の３項移動平均

X_2：北海道全域の小学校数の年平均伸び率の３項移動平均

X_3：北海道全域の公・私立病院収容人員数の年平均伸び率の３項移動平均

と導出された。

表 ２　各種統計量

重相関係数：0.83541

Ｎｏ．	回帰係数β	標準回帰係数β	偏相関係数	βの標準誤差	β'の標準誤差	Ｆ値
Ｘ１	0.28867	0.19828	0.28473	0.21732	0.14927	1.76445
Ｘ２	1.40204	0.41051	0.52619	0.50665	0.14834	7.65781
Ｘ３	0.24624	0.82698	0.81313	0.03942	0.13238	39.02850

（２）　考　察

分散分析の結果、分析比$F_0=15.4029>F^3_{20}(0.05)\fallingdotseq3.10$であり、全体として回帰が有意であることが分かる。また、重回帰係数は0.8をこえている。このことは、説明変数として用いた精神的安定機能の代表指標の選定が妥当であったことと、精神安定機能の構成施設が世帯数の予測に役立っていることを意味している。

次に、説明変数として用いた各施設の世帯数への影響度（寄与率）をそれぞれ標準回帰係数によって比較してみると、図 １７のようになる。

ここで、X_3（病院）は世帯数に大きく寄与しており、次にX_2（小学校）X_1（宗教施設）が続いている。このことから、定住化には精神安定機能を構成する施設の中でも、人間の生命をあずかる施設である病院が最も影響力を持っていることがわかる。

次に、北海道への移住者の多くは家族同伴者が多く、開拓地の定住を次世代においても安心し続けることができるように、特に子供たちに充分な教育を授けることを目的とする教育施設が影響力を持っていることが分かる。

そして、宗教施設は病院や学校のもつ医療、教育という機能を備えているものもあったが、本研究の対象時期においては宗教本来の機能を住民に提供するという観点からみると、定住化への影響力は病院、学校と比較して、数量的にみる限り低いといえる。

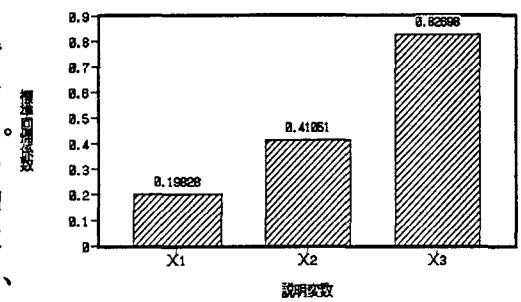

図 １７　定住化への影響度

５．まとめ

北海道開発における宗教施設は、本研究の対象期間である大正から昭和初年にかけて、住民の精神的安定をはかることに寄与していたと言える。この人々に精神的安定をもたらすことを目的とする社会施設の中で宗教施設の移住民定住化への影響力は学校や病院と数量的に比べると小さいながらも、有効性を発揮したことが分かった。また、その施設動態や地域への影響のしかたは北海道の各地域によって様々な特徴が認められた。この動態的特徴の分析によって、人口が増加せず地域社会が困難な状態であっても増加しつづけた宗教施設が存在したことが分かった。この宗教の精神的影響力又は、住民に困難を克服させる機能を地域開発等においてより効果的に利用すべきだと思われる。